第７７回　近畿地区　大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

令和５年４月１２日　日本建築学会近畿支部

No.	作　品　名	学生氏名	大　学・学　科	図面枚数
1	Solar Ark Housing Project―モニュメントと現代集落―	船越　拓	京都工芸繊維大学　デザイン建築学課程	12
2	地跡を縫う―忘れられゆく風景を再編集するフィールドキャンパス―	宮本莉奈	神戸大学　建築学科　都市デザイン	6
3	CIRCULAR CITY―木で創る近未来の暮らし―	望月誠太	摂南大学　建築学科	10
4	無垢日	石橋杏虹	京都建築大学校　建築専攻科	7
5	第二の大学―人と育むリベラルアーツ―	室田健太郎	大阪公立大学　居住環境学科	13
6	かそけきの町　平野が紡ぐ小さな風景	松本明莉	大阪工業大学　空間デザイン学科	10
7	平野郷再紡計画	盛影　聖	武庫川女子大学　建築学科	17
8	ぼくの原風景	多田和香南	関西学院大学　都市政策学科	20
9	みんなの凸凹で□をつくる	田中彩英子	関西大学　建築学科	13
10	学びと表現の場―建築に本気で打ち込む場となる寄宿学校の計画―	伊藤　甫	京都橘大学　都市環境デザイン学科	20
11	Leaving traces of their reverb	村井琴音	京都芸術大学　環境デザイン学科	63
12	高架下がつなぐまち	杉山珠恵	京都女子大学　生活造形学科	4
13	青春へ	奥田大紀	京都精華大学　建築学科	14
14	花遊百貨小路	大竹　平	京都大学　建築学科	20
15	病院×美術館―新たな複合施設の提案―	三浦　凜	京都府立大学　環境デザイン学科	13
16	ついぎのすみか	池田穂香	近畿大学　建築学科	20
17	建築のかけらを拾って継ぐ―道具、家具、建築、土木の輪郭をとかした暮らしの計画―	小林優希	滋賀県立大学　環境建築デザイン学科	18
18	汀で鯨を待つ僕ら	金沢紗月	成安造形大学　芸術学科	20
19	晴耕雨読～ココに余生の拠り所～	中村日南多	大阪芸術大学　建築学科	11
20	箱ノ住む橋、ハコに棲む橋―都市と共存する貨物駅の在り方―	小礒佑真	立命館大学　建築都市デザイン学科	11
21	フェーズフリーホール～街に溶け込む多形態型劇場の提案～	増田一真	京都工芸繊維大学　デザイン建築学課程	8
22	時間×建築―伏見稲荷の陰影が導く時間の建築化―	俣野将磨	摂南大学　住環境デザイン学科	18
23	つなぐ障壁	三木竣平	大阪工業大学　建築学科	20
24	トンボの翅の中で茶の香りを楽しむ―壁で閉じることなく、オープンで穏やかな風環境を作る試み―	北野　智	大阪産業大学　建築・環境デザイン学科	6
25	痕跡が織りなす回想空間	松川裕成	大阪市立大学　建築学科	6
26	富嶽反転―富士山の内的情景をうつしだす―	田内丈登	大阪大学　地球総合工学科	17
27	個室と共有空間に変化を持たせ自立を促す	河野眞大	大阪電気通信大学　建築学科	4
28	Re：Memory～建築廃材を用いたアップサイクル体験型複合商業施設の空間提案～	西井　和	帝塚山大学　居住空間デザイン学科	6
29	千里ニュータウンの孤立死と現代のメメント・モリ	高山竜詠	京都建築大学校　建築学科	8
30	路と杜の復興計画―南部駅周辺の事前復興計画―	石倉佳紀	和歌山大学　システム工学科	10
31	別荘地をステップ集落へ	鳥越結貴	明石工業高等専門学校　建築・都市システム工学専攻	6
32	家の弔い方	清水奈美	奈良女子大学　住環境学科	11
33	農地エリア周辺におけるオールドニュータウンの活用の在り方～まちの暮らしと農業～	石井佳奈	武庫川女子大学　生活環境学科	13
34	地域に生きる学び舎―学校建築の解体と地域コミュニティの再編成―	衣輪百萌	兵庫県立大学　環境人間学科	6
35	堂々たる擡着―港湾倉庫のコンバージョンによる公共図書館の設計提案―	長央尚真	神戸大学　建築学科　建築デザイン	16

（受付順）以上35点＜Ｎｏ．欄に○印のものは入選作品＞

日本建築学会近畿支部
令和４年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第７７回）審査報告

審査員長　中島　上

令和５年４月１２日（水）　審査会場：Web 会議システムを利用

審査員長（互選）　中島　上
審査員（50 音順）　梅田善愛・小平弥史・児玉克史・根木和人・東園浩文・三好陽介
応募作品　　３５点（別紙参照）

審査経緯
第 77 回審査会は対面形式ではなく、前年に引き続き WEB での開催となり、設計事務所及びゼネコン設計部所属の実務経験豊かな 7 名によって審査が行われた。審査員は各応募作品の PDF データを事前に受け取り、丹念に読み込んだ上で審査会に臨んだ。
今年は高等専門学校課程を経て専攻科を修了した学士取得者からの応募もあり、更に門戸を広げたことで応募作総数は過去最高の 35 作品となった。
応募された作品は、何れも多種多様な課題に対して真摯に向かい合う姿勢を感じさせる、意欲的で秀逸な作品だった。
第一次審査では、応募 35 作品に対して各審査員が 1 作品に対して 1 票ずつ、6 票を上限に投票を行った。投票結果は 6 票：1 作品、5 票：1 作品、4 票：1 作品、3 票：3 作品、2 票：4 作品、1 票：6 作品となり、この段階で得票の無かった作品は惜しまれながらも選外となった。得票数が 1 票の 6 作品については、見落としが無いよう、多角的な視点で評価することを心掛け、作品の魅力となる評価ポイントを各々の審査員が解説し合い、反対意見も出し合う形で議論を重ねた。
その議論を踏まえて、第二次審査へ駒を進めた 16 作品に対して各 4 票の投票を行った。投票結果は 6 票：2 作品、4 票：1 作品、2 票：1 作品、1 票：8 作品となり、議論を重ねる中でも 6 票を獲得する作品の秀逸さが顕著に表れていた。得票数が 1 票だった 8 作品についても再度議論を行った結果、第三次審査には 7 作品が駒を進めた。
第三次審査では各 2 票を投票し、その結果は 6 票：2 作品、2 票：1 作品となった。6 票を獲得した 2 作品は第一次から第三次までの審査を通して絶えず多数票を獲得し続けていた。それとは対極的に 2 票を獲得した作品は、議論を重ねる中で改めて評価が見直され、第二次審査結果から逆転しての得票だった。
この 3 作品を、学生、生徒の設計技能を向上させるという当コンクールの目的に沿う好例であり、抜きん出て優秀であると評価し、入賞作品として選定した。

（中島）

審査概要
卒業設計は、自らテーマを決めて進めることが出来る自己表現の場であり、社会人になってからも忘れることのない貴重な経験となる。そんな思いのこもった力作が今年は例年よりも多い 35 作品集められた。
審査では、テーマ設定に対する魅力、そのプロセスや提案力、その内容を伝えるプレゼン力などが問われる。プレゼン力については、一応に高くこちらが勉強になるほどの優れた作品も多数見受けられた。その一方でやりたいことが何であるのかが不明もしくは難解な作品も散見された。紙面だけのコンクール等では、相手にわかってもらう表現とすることは、とても重要である。また、テーマ設定についてはユニークで好感のもてる作品も多数見受けられたが、そのロケーションにあった合理性、親和性、創造性といった最終的なアウトプットとしての説得力においては、未完成なまま力尽きた作品が半数をしめた。
　そんな中今回選ばれた 3 つの作品は、いずれもストーリーとして創造性に富み、実際に出来上がった作品を見てみたいと思わせる説得力のあるものであった。他にも今回はおしくも選外となったが、評価の高い作品もあったことを付け加えたい。
（東園）

ぼくの原風景

多田　和香南君（関西学院大学）

大阪市内を流れる水辺に対する、いやカミソリ堤防によって水辺でなくなった場所への提案である。遮るものを破壊するのではなく、いくつかの建築を添えて水に親しめる空間を仕込み、暮らしの中に身体的な体験を蘇らせることを意図している。水都大阪の整備事業がいくつも実現されているが、どちらかといえば表向きのものが多いのに対して、本提案はごく付近に暮らす人々に向けたプロジェクトとなっている。
私的な原風景が始まりではあるが、世代をまたいで受け継がれた私であり、界隈の住民ならみなが抱き共有できるだろう心象風景が、みずみずしいイラストと文章で描かれている。ものがたり風に語られる作品は例年あるが、秀逸なプレゼンテーションが見る側の琴線にふれてくるようで、多くの審査員の高評価につながった。実現には高いハードルがあるものの、ますます重要とされる防災施設整備のあり方という公の課題には、私的な感情こそが力になりうると期待させられる。
丁寧に造形されている個々の建築で考えられていることは詳しく語られていないが、それぞれの場の機能を手掛かりに思い思いに使われてく様を、読み手自身なりに想像させる表現も、提案に相応しい作品となっている。
（小平）

ついぎのすみか

池田　穂香君（近畿大学）

詳細な植物観察と暮らし方の繋がりなど、本人に質問できない中で正当な評価がくだせるか迷ったが、丁寧なつくり込みと美しい表現が、最後まで自己を理解させようとする力を持ち続けた。「終わらせる」ことを設計行為として認識し取組んだことを評価したい。人にとっての「終の住処」、家にとっての「建築の弔い方」は、我々建築に携わる者が「脱成長」という発想を持って真剣に取り組まねばならない重いテーマでもある。「終わらせる」ことは「取り壊す」ことではないという発想でこの作品を読み込めば、人間が主役のつもりで突っ走った高度経済成長の果て、残された課題のアンチテーゼとして、人と植物と家が、共に必要とし、共に成長し、共に変化し、住み継がれ、つくり継がれる新しい世界観と建築様式の可能性が見えてくる。今後作者に期待したいのは、「終わらせる」ことに「始める」ことをシンクロさせること。老夫婦と植物と家が「次の住まい方」、「次の住み手」を呼び寄せ、老夫婦の残りの 20 年に新しい生命の時間軸が重ねられていく様子が描かれていたらと、そこまで期待してしまう魅力ある作品だった。

（梅田）

富嶽反転―富士山の内的情景をうつしだす―

田内　丈登君（大阪大学）

「日本人にとっての富士山は何か？」という言葉に、最初は壮大で捉えどころが難しいテーマと感じたが、読み進めるうちに設計者の富士山に対する“思い”と課題解決のための“建築手法”が明確に伝わり共感を覚える作品であった。
日本の象徴、祈りの山、芸術の源泉・・・・「日本人にとって敬愛する心のよりどころ」である富士山は戦後のレジャー産業の発展に伴い、登山者が増える一方、時代とともに富士山から受ける情景が失われていることが課題提起されている。
この作品は富士山が日本人の潜在的意識に寄り添ってきた感情を「内的情景」という表現からアプローチし、「独自の形態手法」を用いて新しい建築の可能性へと展開する物語とそれを表現する叙情的なプレゼンテーションが多くの審査員の評価を得た。建築は標高も異なり多様な要素が存在する 6 か所の場所に計画されている。登山者は山頂への軸線（＝ベクトル）を強く意識するが、6 つの建築には設計者独自の分析による内的情景から導かれる別のベクトルを与えている。その結果、通常の登山では気づかない新たな視点をうみだし、その場所でしか感じ取れない自然と人の合間を繋ぎ合わせる建築を創出している。風・光・水などの自然要素を組み込まれた 6 つの建築に訪れ、そこから見える新しい情景を楽しみたいと思わせる作品であった。

（児玉）